

サーレマー島の休日



ラトヴィア・リーガ市在住

黒澤 歩

「ラトヴィアはどんな天気なの？」

「ちょっと曇りだったけど。ここは明日はどうかしら？」

ヤーンさんは空をちらりと見上げ、サウナ小屋のドアを開けながら言いました。「こっちは明日もいい天気になるよ」

「明日、自転車お借りしたいんだけど、私が乗れる小さいものもあるかしら？」

「大丈夫でしょう。用意しておきます。うちは今日は妻と息子の誕生日で、客人があるんだ」

2、3台の車に目を向けました。(おやおや、じゃあ、夜中まで飲んで踊っての大騒ぎかな…)ところが、藁葺きや屋根のサウナ小屋の中で過ごすこと2時間、外からはサッカーボールを気ままに蹴る音しか聞こえてきません。10時半ごろの夕焼けとともに、夜は静かにゆったりと暮れていきました。

5月の初頭、サーレマー島の岬にある穀物倉を改装したゲストハウスに泊まりました。宿泊できる部屋は3つだけ、その日はたまたま私たちの他、母屋の主人の家族以外にだれもいません。母屋からは主のヤーンが2度顔を出したほかには、中学生くらいの少年が一人ボールを蹴っている姿を見かけただけでした。野原に囲まれた広大な自然の中で、まるで百年前に戻って鳥のさえずりに目覚めた朝。

到着したとき、ヤーンに「朝食

は何時に？」と聞かれて頼んでおいた時間に出てみると、朝食室にはいつのまにか暖炉に薪がくべられていて、大きなテーブルいっばいに二人前の朝食が用意されていました。オートミールのお粥は湯気を立て、コーヒーにヨーグルト、ジャムにサラダにチーズとハム、パンがそれぞれ三種類。テーブルに灯されているろうそくが「お待ちしていましたよ」というシグナルなのでしょう。木窓の外野原を眺めながらゆっくりと朝食を終えると、ろうそくの火を消しておきました。暖炉の火もそろそろ消えそうです。

空は小雨でも降らせそうな曇り空。それでも、あのヤーンさんが言ったからには晴れるに違いないと、なぜかそう確信できます。自転車は母屋の前の芝生に2台、ヘルメットと一緒に置かれていました。

さて、ゲストハウスを起点と終点にして岬をぐるりと歩けるはずの散策道をこぎだしてみると、小さな灌木の茂みの中を、小道は明るい森のほうへ導きます。木の矢印がところどころに見えてきました。ところが、雪解け間近をしめす名残か、かなり大きな水たまりの泥濘に先を閉ざされUターン。そこで、17キロ先の島の中心の町クレッサレを目指します。アスファルト道を走りだすと、両側に海が見えてきました。

島の道路は車が少なく、自転車



ゲストハウスに改造したとは見えない納屋



道路標識とネズの木々

の速度で見る道路脇の森には、花開いたばかりの小さな白と黄色が新緑の春の光を浴びています。小鳥たちも猫たちも、ひょっこりと顔を出してくれます。背の低い針葉樹はこの地域に特徴的なネズの木です。成長が遅いぶん固くしっかりとして香り高く、バターナイフやまな板に加工されています。

バルト海は「女性が膝まずいて祈るような形をしている」とラトヴィアの子供に説明されたことがあります。なるほどそういうふうに見えないことはありません。その海に浮かぶエストニア領のサーレマー島は、エストニア語でSaaは島、maaは土地を意味しているそうです。ラトヴィアから車で行く距離は、今年のシェンゲン協定(欧州国間で共通の出入国管理政策及び国境システムを可能にする取り決め)加盟で国境検問がなくなり、さらに縮まりました。

第二次世界大戦時には、ナチスドイツとソ連の最後の砦となって、多くの人々が犠牲となった悲しい過去を持つ島。ソ連時代には軍に管理され、一般人が立ち入り禁止だった島。近年スバリゾートとして国内外の客を集め、そんな過去の傷がまるで嘘のような島。そこには、姿を見せない主の、完璧なまでの私的空間を与えてくれる細やかでさりげないもてなしに感心した、まさに黄金の日々がありました。